

第6類

保育士養成校における遊具制作の意義について

— 31年の取り組みから —

山成昭世

YAMANARI Akiyo

聖母女学院短期大学・児童教育学科は1968年に幼稚園教諭、小学校教諭の教員養成校として設立された。2000年に保育士資格、幼稚園、小学校免許が取得できる保育士養成校、教員養成校となった。

児童教育学科・美術研究室主催の卒業作品展「こどもたちのための遊具」は1978年10期生に始まり、2009年41期生で第31回を迎えた。31年間に創作された遊具総数は約1080点、卒業制作に関わった学生は4800余名になる。制作された遊具の多くは京都市内の保育園、幼稚園、特別支援学級に寄贈されこどもたちに親しまれている。「こどもたちのための遊具」制作は児童教育学科学生全員が制作に携わり、本学の特色ある取り組みとなっている。31年の伝統ある「卒業制作」の実践報告と、教員養成、保育士養成における活動の意義を述べる。

キーワード：木工遊具 卒業作品展 共同制作 31年の伝統 保育者養成

1. はじめに

本学児童教育学科で1968年から遊具制作を行うに至った経緯は、2回生も後期に入ると必要単位を履修し、ゆとりある学生生活ではあるが学生が保育者になろうとするモチベーションまでが低下する様子が伺えた。きっかけは美術科教員の些細な気付きであったが、当時の美術研究室メンバーが学生の現状を危惧し、児童教育学科で学んだ2年間の学びの総まとめとして、教育実習の経験を軸に2回生後期の美術科関連授業において保育者の視点でこどもを捕らえ「こどもたちのための遊具」を造形表現してはどうかと提案され取り組むに至った経緯がある。

本学の美術研究室は「造形教育を通して単に美術作品を創造するだけでなく、人間的に豊かで、想像力に富む保育者、教員を養成する」に主眼をおく。美術研究室のメインとなる取り組み「こどもたちのための

遊具」共同制作は児童教育学科の2年間の学びのまとめとして実践され、その目的は遊具制作によって思考力、計画力、実践実行力、コミュニケーション力を養い、問題に直面したときに見通しを立てて課題を解決できる保育者、小学校教員を養成することである。

「こどもたちのための遊具」共同制作についての実践報告、指導方法、現状、今後の展望を一指導教員の視点で捕らえ、その意義について述べる。

2. 実践の概要

2-1. 概要

- ・ 実施する授業：図画工作2 2回生後期開講
(小学校・幼稚園・保育士の免許選択必修科目)
- ・ 授業時間数：1コマ90分 15回授業
- ・ 最終15回目は「卒業作品展」として学外に向け作品発表する。
- ・ 履修学生：2回生ほぼ全員選択する。

- ・ 受講条件：図画工作1を履修し基本的な木工制作の技術を身につけ小作品を制作している。

(31年間で授業名称変更や授業時間、授業回数は諸事情により多少変化している部分もあるが、2回生後期の実施時期に変更はない。)

2-2. 方法と内容

実践方法

卒業制作を实践するに至った経緯は「1. はじめに」で触れたが、第1回卒業制作から第30回まで、本学に夙川学院短期大学の小林伸雄教授が、兼任講師として本学の美術教育に携わっておられた。夙川学院短期大学は、本学より1年早く卒業制作を実施し歴史ある取り組みとなっている。夙川学院短期大学の場合は、造形表現に強く興味や関心を持った学生が選択履修し個人制作で木工遊具作品、マリオネット、樹脂を使った遊具など素材と内容がバラエティ豊かに展開されていた。小林教授のご提案を参考に本学で取り組み可能な方法を考えたところ、木工のための設備と空間は十分とはいえないが整っており、木工による卒業制作を1968年から実行することとなった。

夙川学院短期大学より一年遅く開始した卒業制作ではあるが、本学の独自性として①児童教育学科の卒業生全員が遊具制作を行う。(造形美術、2回生後期開講)②実践形態はグループ制作とする。この2つは聖母の卒業制作の大きな特色であり31年経ても変わっていない。加えて、木工を実行する意図として、160名前後の全学生によるグループ制作で40前後の作品が制作される。4クラス編成で教員1人が10作品前後を指導にあたる。専任教員1クラスで他3クラスは兼任講師に委ねていた現状もあり、時間外の学生対応や指導等を考えると扱う素材や技法が多様になると十分な指導と学生対応ができない状況が推測された。学生の安全や設備を考え、卒業制作をスムーズに実行するためには一つの技法や内容にまとめることがよりよいと考え木工で行う事となった。しかし、回を重ねアイデアの模倣の禁止や、学生たちが作りたい造形表現が木工制作のみの対応では困難となり、数年後には教員側の指導体制も整い次第に樹脂や布地、ウレタンの使用を認めるようになった。31年で木工の教授方法が確立したこともあるが、合板素材は初心者でも比較的簡単に立体を組むことができ、作業計画、実行、作業予測など見通すことができる優れた材料であると

考える。

実践内容

- ①保育実習、教育実習での学びや体験で得た、ここの発達や運動能力を考えた「こどものための遊具」を制作する。
- ②「こどものための遊具」は安全性を第一に考慮した遊具であること。
- ③合板材の特徴から室内遊具を前提とする。
- ④他作品の模倣は避ける。
- ⑤15回授業のうち12～13回で完成(表1)
- ⑥1クラスおよそ35名前後1グループ4～5名の共同制作とする。(グループ、グループリーダーは学生が決める。)
- ⑦制作に関してはグループの主体性を重視し、教員はアドバイザーとしてかかわる。
- ⑧「制作ノート」に作業計画の細かな内容を記入し、メンバーや担当教員が共通理解を持つために活用する



制作風景

- ⑨木工制作を主とする。

学校より支給される基本的な材料として 900 mm×1800 mm×12 mmシナベニヤを1グループ2枚。

角材、小割り木材、薄いベニヤ板、水性ペンキ、木工ボンド、紙やすり、釘などの消耗品。

その他必要材料はグループで購入する。

- ⑩材料は合板を基本とするが、合板でイメージする造形表現が不可能な場合は、他材料の使用も認める。
- ⑪工具の正しい使用法を身につける。
- ⑫15回目の最終授業は「卒業作品展」として学外に発表し、こどもの遊ぶ姿を観察し作品を考察する。
- ⑬作品は希望があれば保育所、幼稚園、児童館に寄贈する。
- ⑭使用道具は鋸 金槌 カンナ 木工やすり 電動ミシン鋸 ジグソー 電気ドリル 刷毛など。



制作風景



制作風景

2-3. 授業計画

モデルとする 15 回作業計画 (表1) を学生に示すが、決められた授業時間内に完成することはない。学生が自主的に時間外作業を設定し作品制作を行う。

モデルとなる授業予定 (表1)

回数	授業の内容	主な作業内容
1	計画と立案1	ガイダンス プランニング
2	計画と立案2	プランニング 設計図
3	計画と立案3	設計図 エスキス制作 木取り
4	制作1	木取り
5	制作2	切断
6	制作3	切断
7	制作4	切断 組み立て
8	制作5	組み立て
9	制作6	組み立て
10	制作7 塗装1	安全性の確認 研磨
11	塗装2	塗装のための下処理
12	塗装3	完成に向けての塗装
13	仕上げ、作品提出	完成に向けての仕上げ
14	鑑賞と評価	合 評
15	発表	「卒業作品展」開催



合 評

2-4. 31年の歴史から見えてきたこと

造形表現を通して人間的に豊かで、想像力のある保育者の育成を目指しこどもたちのための遊具制作は31年間行われてきた。

こどもを主体に教育実習の経験を軸にした2年間の児童教育学科の学びの総まとめとして学生による遊具制作の取り組みと、遊具制作のコンセプトである造形教育を通した保育者の育成は不変である。実践方法として制作の基本は木工であり、実践形態は他者とのコミュニケーションを図り制作に取り組むグループ共同制作は今後も変わることはないが、よりイメージする造形表現が実現できるよう、木では対応できない場合に限り他素材の使用も緩やかに認めている。

現在は保育職、教育職を希望する学生は社会的ニーズもあり複数の資格や免許を取得する傾向にある。本学も10年前から複数資格を取得でき、実習、授業回数が過密になり、以前のような余裕ある学生生活を過ごすことができない現状である。学生が思索し自らの乏しい経験ではあるが実習や学校での学びによって自らの保育観や教育観を育む余裕さえ奪われてきている。教員もまた実習対応や授業数確保のために多忙を極め、学生と深く向き合い考えを具体化させるため深く関わる時間が激減している。考える時間、試行錯誤し作品制作する心の余裕と、時間の余裕が見出せないのが昨今の現状である。そのような現状の中、学生の保育職に対する意識も一昔前と大きく変化し、以前のような実践形態、内容、方法では対応が困難な状況であることも否めない。しかし、そのような状況だからこそ、造形活動を通して保育観や教育観を育む「遊具制作」は貴重な体験となっている。同時に本学の保育者養成の特色でもあると考える。



27回 卒業作品展


 第26回
卒業作品展

 第29回
卒業作品展

3. 考 察

筆者は本実践に第1回から関わってきた。日々の授業は2年の短期間で保育者の指導力の向上や、幼児の造形表現の能力を向上させるための指導法など専門教育が強く求められている。そのような中、本実践で学生は完成近い約1ヶ月間、制作に明け暮れる非日常な体験をする。その体験は学生に造形表現を通して内的考察をする時間を与え、メンバーと共同して仕上げた達成感が自信となっている。これらのことは学生の書き記した「制作ノート」の感想から読み取ることができる。学生気質の変化、保育職への意識の変化等、31年で変化したものは多い。しかし、本学の美術教育の主眼「本学の造形教育を通して単に美術作品を創造するだけでなく、人間的に豊かで、想像力に富む教員を養成する。」は守られ、実践のコンセプトである、す

なわち「造形教育によって思考力、計画力、実践実行力、コミュニケーション力を養うと共に、問題に直面したときに見通しを立てて課題を解決できる保育者、教育者を養成する。」は引き継がれて伝統となっている。

近年の卒業制作の作品傾向として安易な形に走り、既製品の模倣が多く、形態がパターン化する作品が増えてきている。構造に工夫が見られず、同じ傾向の作品が多く制作されていることに危惧し、教員側の対応の変換を強く感じる。さらに会場発表のイベント的効果を狙うあまりに、作品の大型化傾向が目立ってきた。展覧会場において大型作品は存在感があり演出効果は大きい。大型作品は、学生の工作技術が伴わず壊れやすく安全性が危ぶまれる場合が強い。また、大きすぎて保育の場に設置されずに、作品展終了後に処分される作品も多数ある。「こどものための遊具」ではなく「作品展のための遊具」への傾向は否定できない。だからこそ教員側としては原点に立ち戻り、「こどものための遊具」制作を問い直す時期であると強く思う。

数々の反省から2009年は「こどものからだところのサイズ」を確認するため、教育実習で観察したこどもの身丈や遊びを振り返り、学生が思索し試行錯誤するための時間を十分に確保したいと考えている。近年の傾向として「課題研究」授業で「こどもの遊具」「こどもの遊び場の調査」「伝承あそび」「ユニバーサルデザインについて」をテーマに取りあげる学生も多い。それらの学習成果を卒業制作に生かす学生も多くなった。加えて「安全な食べ物」「食品とこどものアレルギー」「アレルギー」などをテーマに取り上げる学生もいる。アレルギー反応を起こしやすい塗料、接着剤に注目し蜜蝋ワックスを使用するなど作品に反映させた。学生が造形表現のみに終始せず、保育者の視点を持ち、保育者としての自覚が遊具制作を通して身につけていることを強く実感させられる。教科をこえた学習が卒業制作に生かされ美術科教員も評価し積極的に取り入れるよう働きかけている。他教科での学びと結びつきながら発展させ「安全と用を兼ね備えたデザインへの転換」を試行錯誤しながら取り組もうと考えている。

4. まとめ

単独で開催されていた「卒業作品展」が2008年度から、新たな企画、児童教育学科総合保育イベントとして高齢者からこどもまでを対象とした

聖母「こどもフェスティバル」

～みんな集まれ、ライブ in 深草コミュニティ！！～

と発展した。2008年から卒業制作もこのイベントの一つとして同時開催され教科の垣根を越えて発展したことは喜ばしいことであつた。

子育て支援サークル、児童館、伏見地域と京都市内の保育園、幼稚園、特別支援学級からの多くの参加があり「卒業作品展」で培われた信頼と伝統が、「こどもフェスティバル」の基盤となっていることは言うまでもない。

本実践も母から娘世代へバトンタッチされ、「お母さんも卒業制作で作品を作りました。」との声を聞く。世代は変わっても、その伝統が質の高い保育者養成の一端を担い続けていくつもりである。



第28回作品



第27回作品



第26回作品



第29回作品

【本実践紀要は全国保育士養成セミナー、全国保育士養成協議会第48回研究大会での口頭発表に加筆しまとめた。2009年9月東北福祉大学】

＜ピアスーパーバイザーからのコメント＞

「図画工作2」2回生後期1コマ90分という短い授業時間で卒業作品展として学外に作品発表することはかなりの集中力と精神力、体力が必要であるが、学生の達成感が自信へとつながっている。

しかし作品の大型化により「こどものための遊具」ではなく「作品展のための遊具」への傾向を危惧し、2009年から様々な取り組みを考えている。

①「こどものからだと心のサイズ」の確認のため、学生の思索、試行錯誤の時間を十分に確保する。

②他教科との連携、発展により「安全と用を兼ね備えたデザインへの転換」に取り組む。

など、31年の伝統を継承しながら、「造形教育を通して人間的に豊かで、想像力に富む保育者、教員を養成する」という目標を達成するため、試行錯誤しながら取り組んでいることは大いに評価でき、今後、さらに期待したい。

(担当：家政学科 橘 喬子)